

中世興福寺における別当就任儀礼

「印鑑用意條々」を通して

西弥生

Protocol for Inducing Stewards into Kofukuji Temple in the Middle Ages as Seen through the Inyaku Yoi Jojo

はじめに

- ①「印鑑用意條々」とその内容
- ②「印鑑渡」の次第
- ③「印鑑渡」と寺務奉行
おわりに

【論文要旨】

本稿は興福寺における別当就任儀礼である「印鑑渡」について検討したものである。国立歴史民俗博物館に所蔵される室町前期成立「印鑑用意條々」（水木家資料）は、頭守によって執筆され、興福寺の一院家である東院に伝来したと判断される。その内容は、「印鑑渡」の支度に焦点を当て、大乘院方の記録を抄出したものである。

興福寺別当の就任は、口宣案および藤氏長者宣によって別当に補任され、春日社へ就任の奉告をした後に「印鑑渡」が挙行されるといった一連の流れで実現する。「印鑑渡」の次第は、吉書の儀式、三会（三蔵会・法花会・慈恩会）の放請から構成され、続いて金堂著座が行われる。新任別当の就任を寺院社会に向けて披露するのが「印鑑渡」の趣旨であり、新任別当が加判した吉書および放請への押印が「印鑑渡」の象徴的所作であると言える。

「印鑑渡」の挙行手続きにおいて重要な役割を果たしたのが「寺務奉行」である。「寺

務奉行」には諸職に対する招請文書の発給や諸道具の用意、記録作成など種々の任務があった。大乘院・一乗院の両門跡から別当が就任した場合、その「寺務奉行」には坊官・侍の随一たる者が選任される慣例であり、とりわけ大乘院に関しては坊官家として知られる福智院家より輩出された例が複数確認される。

「印鑑渡」について、次第・支度・挙行手続きの実態を探りつつ「印鑑用意條々」の性格を検討するに、「印鑑渡」において「寺務奉行」を務めることになった頭守が、大乘院方の記録を参照し、個人的に必要な「寺務奉行」に関わる部分を抄出した、実務的要素の強い記録と言える。